<選択教科「音楽」>

郷土の民謡に興味・関心を持ち，伝統音楽に親しむ態度の育成

～三線の教材化を通して～

宜野湾市立真志喜中学校教諭　東　みどり

目　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 41
Ⅱ　研究目標 …… 41
Ⅲ　研究仮説 …… 41
Ⅳ　研究の全体構想図 …… 42
Ⅴ　研究内容 …… 43
1　中学校音楽科の新教育課程について …… 43
(1)　教育課程審議会「答申」における音楽科改善の基本方針 …… 43
(2)　新学習指導要領における音楽科の目標 …… 43
(3)　目標の構成 …… 43
(4)　目標構造の変化 …… 43
(5)　教科目標構成の分析 …… 43
2　沖縄の歌三線の概念について …… 46
(1)　古典音楽と民謡の区別 …… 46
(2)　三線の歴史 …… 46
(3)　古典音楽の系譜 …… 46
(4)　古典音楽の流派 …… 47
3　三線の指導法について …… 48
(1)　工工四について …… 48
(2)　ポジション表 …… 48
(3)　工工四と洋楽譜の関係 …… 48
(4)　三線の構造について …… 49
(5)　調弦方法 …… 49
(6)　三線の奏法 …… 49
(7)　声楽記号について …… 49
(8)　「安里屋ユンタ」の曲の解説 …… 50
4　郷土の民謡，三線に関するアンケートからの結果と考察 …… 51
Ⅵ　授業実践 …… 53
1　題材名 …… 53
2　題材の目標 …… 53
3　題材について …… 53
4　指導計画 …… 53
5　本時の展開 …… 55
7　研究仮説の検証 …… 57
Ⅴ　研究の成果と課題 …… 58
1　研究の成果 …… 58
2　今後の課題 …… 58
3　終わりに …… 58
<主な引用文献・参考文献> …… 59

<選択教科「音楽」>

郷土の民謡に興味・関心を持ち，伝統音楽に親しむ態度の育成

～三線の教材化を通して～

宜野湾市立真志喜中学校教諭　　東みどり

Ⅰ　テーマ設定の理由

今日のわが国における科学技術の進歩は，物質的に豊かな社会を形成してきた。それとともに情報化や国際化が進み，簡単に世界中のあらゆるジャンルの音楽が家庭をはじめ，あらゆる場所で聴けるようになった。子供達もポピュラー，ロック，アイドル歌手などの音楽を好んで聴く子が多い。なかにはギターを購入し仲間同士でバンドを組み楽しんでいる子供達もいる。ところが，子供達の中には，ある特定の音楽に引き込まれそれだけが音楽だと思い込んでいるような子もいる。これは自ら広い音楽の世界に壁を作っているようなもので，それ以外にも価値のある音楽があることに気付かないままに中学校生活を終わってしまう傾向がある。また，物が豊かになった反面，情緒の不安定や心の豊かさの欠如からか，いじめや少年犯罪などが増えてきた。そこで今日，理性と感性のバランスの重要性が指摘される中，真の美しいものに触れる体験を重視し，豊かな情操を養うという音楽教育の使命が一層強調されてきているのである。

このような社会変化への対応として，平成10年12月に中学校学習指導要領が全面的に改訂された。今回の改訂では，教える内容をその後の学習や生活に必要な最小限の基礎的・基本的内容に厳選し，ゆとりの中で繰り返し学習したり作業的・体験的な活動，問題解決的な学習や自分の興味・関心等に応じた学習にじっくりと創意工夫しながら取り組めるようにしている。音楽科においては，生徒が楽しく音楽にかかわりながら音楽活動の喜びを得，生涯にわたって音楽に親しむ態度を育成することを重視している。また、明治初年から戦前までの歌唱中心の音楽教育も，戦後になると歌唱，器楽，創作，理論のすべてに拡大されたが，やはり授業の中心になるのは西洋音楽を中心としたものであった。わが国の音楽教育は，ことあるごとに西洋に偏した音楽教育と称されてきたのである。

それらを踏まえ，新中学校学習指導要領音楽科における改善の要点として，以下のことを重視している。一つは「生涯音楽に親しむ態度の育成」であり，もう一つが「わが国や郷土の伝統音楽を重視すること」である。さらに，具体的事項の一つに,「和楽器などを活用した表現や鑑賞の活動を通してわが国や郷土の伝統音楽を体験できるようにする。」があげられている。

自分自身の鑑賞授業を振り返ってみると，やはり西洋音楽が大方であり，日本古来の伝統音楽は雅楽「越天楽」などを教材とし，由来，楽器名を理解し鑑賞するという授業形態であったが常々，郷土の音楽を取り上げ実際に楽器で演奏ができるようになってほしいと思っていた。郷土の音楽には三線，箏，太鼓，笛などが使われていて祝いの席やお祭りなどではよく演奏される。私は，沖縄県民6人に一丁宛あるといわれる三線の教材化を通して生徒達が時代を越えて生き続けてきた郷土の音楽に触れることで，郷土の芸能や文化のすばらしさについて理解し，生涯にわたって音楽に親しみ伝承していけると考え，本テーマを設定した。

Ⅱ　研究目標

三線の教材化をして郷土の民謡に興味・関心を持ち，生涯にわたり伝統音楽に親しんでいける態度を育成する。

Ⅲ　研究仮説

1　三線を自分で組み立てる過程から体験することにより，生徒が興味・関心を持ち伝統音楽に親しむ態度の育成ができるであろう。

2　郷土の民謡を教材化することにより，生徒が興味・関心を持ち伝統音楽に親しむ態度が育成できるであろう。

3　発表の場を工夫することにより，生徒が郷土の民謡に興味・関心を持ち伝統音楽に親しむ態度の育成ができるであろう。

Ⅳ 研究の全体構想図

教育関係法規
- 日本国憲法
- 教育基本法
- 学校教育法
- 学校教育法施行規則
- 学習指導要領
- 県の教育施策

真志喜中学校教育目標
- 心身共に健康でねばり強く，実践力のある生徒
- 自ら進んで、よく学ぶ生徒
- 善悪を正しく判断し，行動できる生徒
- 明るく情操豊かな生徒

めざす生徒像
- 豊かな広い心を持ち礼儀正しい生徒
- 明確な目標を持ち自ら学び続ける生徒
- 自他の生命を尊重し心身ともに健康でたくましい生徒

研究テーマ
郷土の民謡に興味・関心を持ち，伝統音楽に親しむ態度の育成
～三線の教材化を通して～

生徒の実態
- 明るくのびのびしている
- 学級活動など協力的である
- よくあいさつしている
- 読書量が多い
- 整理整頓や後始末が不十分
- 家庭学習が不十分

音楽科の目標
表現及び鑑賞の幅広い活動を通して，音楽を愛好する心情を育てるとともに，音楽に対する感性を豊かにし，音楽活動の基礎的な能力を伸ばし，豊かな情操を養う。

研究目標
三線の教材化を通して郷土の民謡に興味・関心を持ち，生涯にわたり伝統音楽に親しんでいける態度を育成する

教師の願い
- 郷土の音楽に親しみ興味・関心を持つ生徒
- 沖縄の芸能や文化の素晴らしさを感じ取れる生徒
- 郷土の芸能や文化を伝承していける生徒

学習指導要領改善の要点【音楽科】
- 生涯にわたって音楽に親しむ態度の育成
- わが国や郷土の伝統音楽の重視

研究仮説
1 三線を自分で組み立てる過程から体験することにより，生徒が興味・関心を持ち伝統音楽に親しむ態度が育成できるであろう。
2 郷土の民謡を教材化することにより，生徒が興味・関心を持ち伝統音楽に親しむ態度が育成できるであろう。
3 発表の場を工夫することにより，生徒が郷土の民謡に興味・関心を持ち伝統音楽に親しむ態度の育成ができるであろう。

【音楽】選択教科の目標
生徒の特性などに応じ，課題学習、創造的な表現活動の学習，郷土の伝統芸能など地域の特質を生かした学習，表現の能力を補充的に高める学習，芸術表現を追及する発展的な学習などの学習活動を各学校において適切に工夫して取り扱うものとする。

研究内容
1 中学校音楽科の新教育課程
2 沖縄の歌三線の概念
3 三線の指導方法
4 学習指導法の工夫

研究方法
1 生徒の実態調査と分析
2 文献・資料による理論研究
3 三線奏法の研修
4 授業の指導案の作成

検証授業の計画・実践・分析

研究成果のまとめ・今後の課題

V　研究内容

1　中学校音楽科の新教育課程にについて

（1）教育課程審議会「答申」における音楽科改善の基本方針

平成 10 年7月の教育課程審議会「答申」を受けての音楽科改善の基本的な方針は以下の示す通りになっている。

○豊かな情操を養う指導の一層の充実

○生涯にわたり音楽に親しむことを促すことの重視

○わが国や諸外国の音楽文化についての表現・鑑賞活動の充実

（2）新学習指導要領における音楽科の目標

教育課程審議会答申の中で示された音楽科の「改善の基本方針」に基づいての音楽科の目標は次の通りである。

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して，音楽を愛好する心情を育てるとともに，音楽に対する感性を豊かにし，音楽活動の基礎的な能力を伸ばし，豊かな情操を養う。

（3）目標の構成

この音楽科の目標は，次の五つの項目によって構成されている。

①「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して」

②「音楽を愛好する心情を育てる」

③「音楽に対する感性を豊かにする」

④「音楽活動の基礎的な能力を伸ばす」

⑤「豊かな情操を養う」

（4）目標構造の変化

この改訂された音楽科の目標は，従前と比較すると次の諸点に違いがある。一つ目は，「音楽を愛好する心情」が「表現及び鑑賞の活動を通して」と連なって示され，目標の柱の順序が変わったことである。二つ目は，「音楽性」が削除され「音楽活動の基礎的な能力」と用語が変わったことである。

この五つの項目の関連を構造図で示すと，下の図のようにとらえることができる。

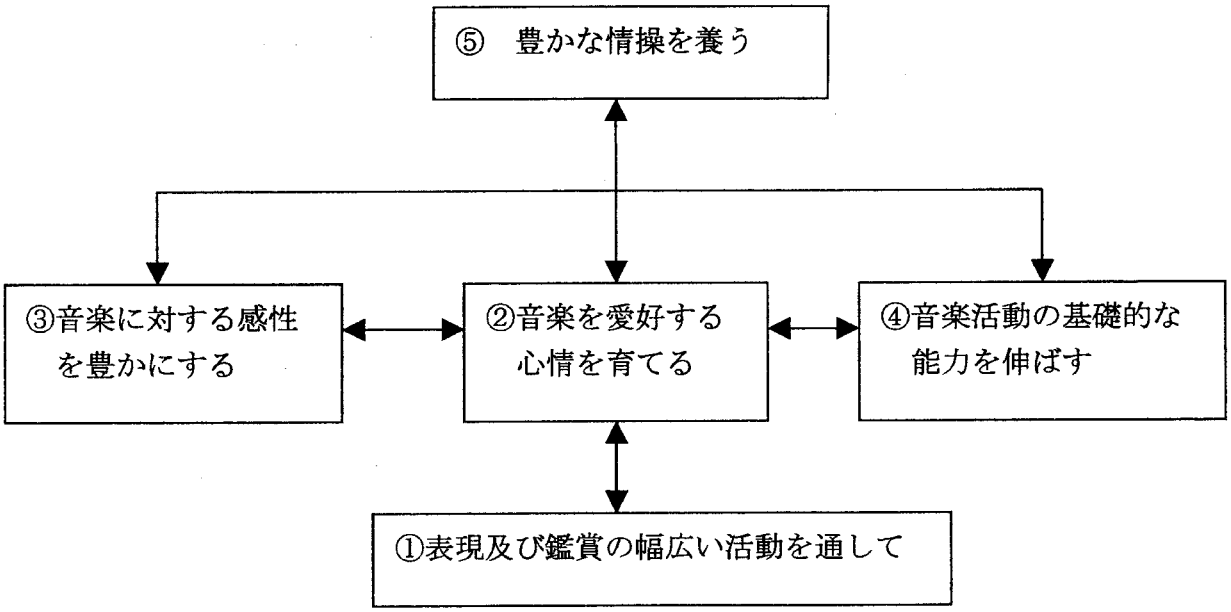


図1　教科目標の構造図　峯岸創編著『新中学校教育課程講座＜音楽＞』ぎょうせい,2000,p.42。

（5）教科目標構成の分析

目標構成を分析してみると，第一に，「表現及び鑑賞」とは，音楽とのかかわり方であり，両者を互いに関連させながら学習を進めることが大切である。音楽科の学習は，生徒が音楽と積極的なかかわりをもつことによって成立するのである。

第二に，「音楽を愛好する心情を育て」は，単に学校の音楽を好きにするという狭い考えでなく，音楽文化全体について愛好する心をもってもらいたいという意味で，これは現行と変わらない。

第三に，「音楽に対する感性を豊かにする」とは，音楽科の重要な目標である。変化の激しい現代社会を生きる上で，知性面と感性面の調和がとれた人間性を培うことは，これからの教育において一層必要とされる。その中で音楽科の果たすべき役割は，音楽の豊かさや美しさに対する感性を育てることである。

第四に，「基礎的な能力」とは，今回の改訂で

新たに加えられた音楽活動であり，生涯にわたって楽しく充実した音楽活動ができるための，基になる能力を意味する。それは，音楽を形作っている諸要素を感受する能力である。図を用いて説明すると，下のようになる。それでは，「基礎的な能力」について調べてみたい。音楽科における「基礎的な能力」とは，生徒が音楽にかかわり生涯，自分の音楽的能力を伸長させ，それとともに人間的発達を促していくものにならなければならない。以下に西園芳信氏・小島律子氏による図を用いて説明する。

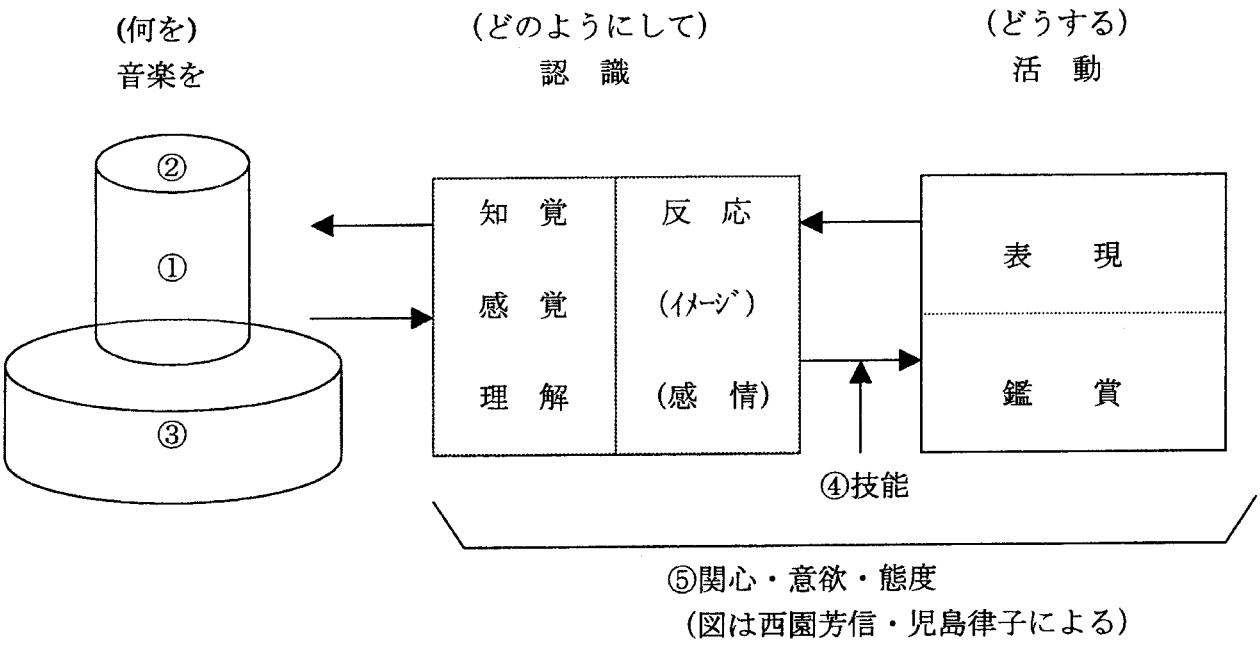


図２　音楽の認識と学習　『新中学校教育課程講座＜音楽＞』ぎょうせい,2000,p.45。

図の中の①は，音楽の「かたち」となる音色，リズム，旋律，和声を含む音と音とのかかわり合いや形式などの構成要素と，速度，強弱などの表現要素による構造的側面である。②は音楽の「なかみ」となる雰囲気，曲想，美しさ，豊かさ等の感性的側面である。③は「かたち」と「なかみ」がどういう「背景」(風土・文化・歴史）の中で成長しているかという文化的側面をいう。こういった「かたち」「なかみ」「背景」から成立している音楽を実際的に演奏として表現するときには④の技能が必要となる。さらに，これらの音楽の指導内容を学習するときには，⑤の関心・意欲・態度の情意的側面が求められる。

そして，これらの指導内容によって育成される能力を整理すると，次のようになる。

①構造的側面－（構成要素・表現要素）－知覚
②感性的側面－（雰囲気・曲想・豊かさ・美しさ）－感受
③文化的側面－(風土・文化・歴史)－知覚・感受・理解
④技能的側面－（歌唱・器楽の表現技能，合唱・合奏技能等）－技能
⑤情意的側面－（関心・意欲・態度）－学習成立のための情意的意識の能力

これらの諸能力の中で「基礎的な能力」は，音楽の①構造的側面と②感性的側面を感受する能力となる。つまり，音楽の構造的側面を知覚し，それらの構造的側面の働きによって生まれる曲想・雰囲気・豊かさ・美しさをイメージや感情をもって感じ取る能力となるのである。以上のことから，生徒が音楽にかかわり，生涯，自分の音楽的能力を伸ばしそれとともに人間的発達を促していけるようにすることが重要であると思う。

最後に，「豊かな情操を養う」であるが，この「情操」という言葉は戦前，戦後を通じ音楽科の目標に見られるもので，わが国の音楽科教育が歴史的に継承してきた言葉である。「中学校学習指導要領」においては，昭和３３年度版からはそれまでの「美的情操」が「情操」に変わり，広い概念で「情操」の言葉を用いている。この

ように音楽科の目標構成において重要な位置付けとなっている言葉を「美的情操」から「情操」に変えた理由について，当時の「小学校学習指導要領の展開（音楽科編）」を見ると次のようになっている。

「『情操を高める』」の情操は，音楽に関する美的情操を高めることが中心になることはいうまでもないが，音楽が人間の中に占める位置を考えて，ここでは，知的，道徳的，宗教的情操に深いつながりがあるという立場から人間の全情操を高めていくのに欠かすことのできぬとの見解で，広く「情操」という言葉が用いられている。」

「美的情操」を「美的」という接頭語を取り，単なる「情操」とした理由について，ここでは音楽によって培われる「情操」は，決して「美的情操」だけでなく「知的情操」「道徳的情操」「宗教的情操」ともかかわっているという考えから，広い意味での「情操」という言葉にしたとなっているのである。

多様な音楽活動を通して，これらのねらいを実現し，豊かな情操を養うことが，音楽科の目標の本旨であり，教科の目標構成の中で不易の言葉である。

以上のことを踏まえて，①の「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して」の中の幅広い活動ということについて改めて考えてみたい。限られた授業時数の中で，どういう工夫で「幅広い活動」を展開したらよいかと悩むところである。新しい教育課程は，「総合的な学習」の時間が新設されたことから，「教科の学習」「選択教科の学習」「総合的な学習」「道徳・特別活動」という四つの部門から構成される。このように学校全体の教育課程を見ると音楽のかかわるところは，「教科の学習」だけでなく教師の工夫や生徒の選択によって多様に展開できる。そこで，「総合的な学習」と「選択教科の学習」の面から例をあげて考えてみたい。

まず，「総合的な学習」の面から見た音楽教科のかかわり方であるが，今回の改定では，各学校が地域や学校の実態等に応じて横断的・総合的な学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとしている。例えば，伝統芸能を取り上げたときに，社会科で身につけた調べ方の技能を使って，地域の伝統芸能について地理的・歴史的観点から調べたり，音楽科で身につけた基礎・基本をもとに，民謡などを演奏したりすることができると考えられる。

次に，「選択教科の学習」の面から見た教科のかかわり方であるが，中学校の教育課程には，「選択教科に充てる授業時数」が各学年とも設定されていて，生徒の興味・関心から音楽を履修し自己の音楽的能力を伸ばしていくことができるようになっている。例えば，「課題学習」では，一人一人の生徒が音楽に対してもっている「もっと表現したい，鑑賞したい，調べたい，深めたい」などの課題を設定し，主体性を生かした課題学習を行うことができる。「創造的な表現活動の学習」では，必修における基礎的・基本的な学習を生かして，一人一人の生徒のイメージや曲想を大事にし，豊かな表現を発達段階に応じて発展させていくことが考えられる。「郷土の伝統芸能などを生かした学習」では，地域の伝統芸能を教材とするなど，地域の特質を生かした学習へと発展させることが考えられる。「芸術的な表現を追及する発展的な学習」では，必修教科としての「音楽」での学習体験の深化・発展として難易度の高い楽曲の表現や高度な演奏技能による表現を目指すだけでなく，個々の生徒が自分なりの音楽の美しさを主体的に追求し，よりよいものを創り出していこうと個々の生徒の特性を生かして音楽的な諸能力を一層高めていく活動が考えられる。このように，学習活動を各学校において工夫して取り扱うことができるようになっている。

しかし，いずれも肝要なことは，生徒が選択教科として音楽を選択するには，必修音楽において，音楽の楽しさや興味・関心を喚起させることが大切であり，教科の指導の充実を図ることが必要になってくることである。

ちなみに，必修音楽の学習においては，その学習目標の達成のために，生徒の学習スタイルに合わせた多様な学習方法や生徒の興味・関心に対応した教材が選択できるような授業法の改善が現在，求められているのである。

さらに，「教材面」から見ると，新中学校学習指導要領では，表現教材，鑑賞教材どちらも「わが国及び世界の古典から現代までの作品，郷土の伝統音楽及び世界の諸民族の音楽を取り扱

う」となっており，表現も鑑賞も共通教材を示さないことになった。このように，教材の選択幅の拡大と，教師の指導法の工夫によって，生徒の「幅広い活動」が展開できるようになった。

以上のことから，教師の教材研究の大切さを痛感する。

2　沖縄の歌三線の概念

（1）古典音楽と民謡の区別

沖縄の歌三線の世界は，普通，古典音楽と民謡に分けて考えられている。おおよそ廃藩置県以前の曲を古典音楽，それ以後の曲は民謡といっているようである。しかし，一曲一曲を指し示して，古典音楽か民謡かを区別しようとすると曖昧になってしまう曲もあり、その区別をどこで線を引くかという問題につきあたってくる。そのことに対して勝連繁雄氏は，古典音楽と民謡の概念の区別をその様式に着目して「古典音楽の曲想は一般に重厚である。厳粛な儀式歌の役割をもって様式化されたものであり，個々人の魂を比喩し得る精神の深さをもっているものまで，多岐にわたっている。旋律は全体的にゆったりとした流れをもっている。民謡は庶民の心が生み出したものであり民謡は，生活感覚，風俗，伝説，古謡などと深い関係をもち，時代の流行をも反映し琉歌調の俗歌（歌詞）とも強く結びついている。しかし，古典音楽は，芸術意識をもった人たちの創造の産物であると同時に，民謡からの吸い上げでもある。それはある時期に一挙に形成されたということではなく，長い年月の間に少しずつ形づくられたものである。その際，アレンジが弱ければ弱いほど民謡の形を残したままになる。このような曲が古典音楽と民謡の境目を曖昧にしていると言える。」と述べている。古典音楽についてもう少し説明を付け加えると，古典音楽の多くは琉球王朝時代の上流階層の教養人によって創造されたもので，御冠船芸能(1)と深い関係を持っている。このように古典音楽は琉球舞踊や組踊りと結びつきながら，また一方では，御冠船芸能とも深い関係をもちながら発展してきたのである。

（2）三線の歴史

三弦の起源は，遠く三千年も前のエジプトにまでさかのぼり，それが西に伝わって弓で弾くバイオリン類になり，東に伝わって撥で弾く三弦に変わったといわれる。沖縄の三線も起源を求めていけば，気の遠くなるエジプトまでひきもどされてしまうということになるであろう。ただ，三線楽器がいつ沖縄にもたらされたかはっきりしたことはわからない。

しかし，今から６００年程前，沖縄がまだ「琉球」と呼ばれていた１４世紀から１５世紀頃までには，中国から伝わってきたのではないかというのが大体一致した見方である。初めは宮廷楽器として，身分が高くそれも男性だけしか演奏できない三線も時代が流れ，一般庶民にも普及した。

（3）古典音楽の系譜

伝来した三線楽器に，最初は誰が沖縄の歌を乗せたのだろうか。歌と三線はアカインコがはじめたという歌がある。アカインコに象徴される創始者の歌三線がどのようなものであったか不明だが，民謡とか古典とかに部類分けされる以前の歌ではなかっただろうかと思われる。

その後，三線音楽がどのような変遷をたどってきたかも明らかではないが，琉球音楽史に突如として登場してくるのが，琉球古典音楽の祖とされる湛水親方という人物である。

湛水を始祖として，以下沢岻良沢，新里朝住，照喜名聞覚，屋嘉比朝寄，豊原朝典，知念績高，野村安趙，安富祖正元という系譜になっている。読みにくい名前と主なる業績を以下に示す。

---

(1) 御冠船芸能とは，琉球国王は代が代わると中国皇帝から冊封を受ける習わしになっていた。冊封使の船は，中国皇帝から琉球国王に下賜する冠や衣服を積んでいたことから，御冠船と呼ばれた。冊封使を歓待するために，中秋の宴，重陽の宴で演じられた琉球古典音楽，古典舞踊，組踊などを称して御冠船芸能とよんでいる。

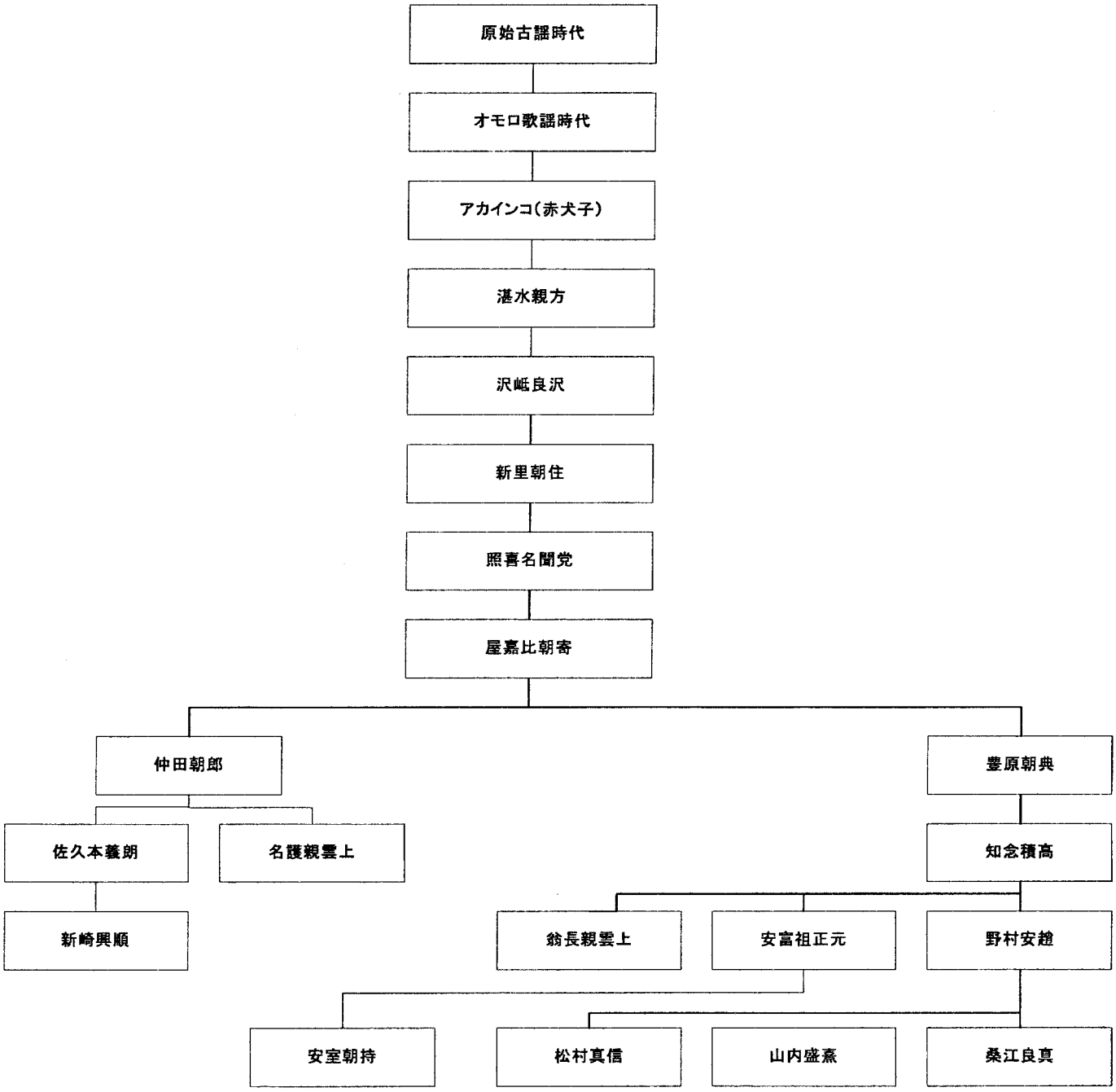


図３　沖縄の三味線略系譜

＜名前の読み方と主なる業績＞

○アカインコ(赤犬子)：三味線音楽の鼻祖。

○湛水親方（たんすいうぇーかた）1623～1688：三味線音楽の基礎を築いた人。湛水流の開祖。

○屋嘉比朝寄（やかびちょうき）1716～1775：琉球三味線楽譜工工四を創案。

○知念積高（ちねんせきこう）1761～1814：発声曲節の技巧が彼によって極度に高められた。

○安富祖正元（あふそせいげん）1785～1865：安富祖流の始祖。歌手養成の師として王府より拝命。

○野村安趙（のむらあんちょう）1805～1871：野村流の始祖。欽定楽譜工工四を完成し琉球古典音楽の大衆化をはかった。

○沢岻良沢（たくしりょうたく）1653～1702

○新里朝住（しんざとちょうじゅう）1650～1712

○照喜名聞覚（てるきなもんがく）1682～1752

○豊原朝典（とよはらちょうてん）1740～1802

（４）古典音楽の流派

古典音楽で流派と呼んでいるのは，安富祖流，野村流，湛水流の三つである。

安富祖流は，安富祖正元を祖とする流派のこと

である。安富祖流は当流にこだわった流派だとされる。当流というのは，大和の謡曲などの素養をもつ屋嘉比朝寄が，琉球古典音楽に改革を加えて打ち立てたもので，豊原朝典を経て知念積高を通して，当流の教えを忠実に継承し，安室朝持，金武良仁へと受け継がれていった。安富祖流の工工四には，声楽譜がなく歌の伝授は伝統的な口伝の形をとっている。現在，安富祖流は，「安富祖流絃声会」と「安富祖流絃声協会」の二団体が活動している。

野村流は，野村安趙を祖とする流派のことである。野村安趙もその師は安富祖正元と同じく知念積高であるが，1867年に尚泰王の命を受けて，いわゆる『欽定工工四』を編纂するにあたって，琉球古典音楽の大衆化をはかって当流に改定を加えたとされる。これが野村流と呼ばれるもので，桑江良真らによって継承され伊差川世瑞（いさがわせいずい）・世禮國男（よれいくにお）によって工工四の上巻，中巻，下巻，拾遺のすべての曲節に声楽譜を付けることによって，広く一般にも馴染みやすくなって野村流隆盛をみるにいたった。現在野村流は，「野村流音楽協会」「野村流古典音楽保存会」「野村流松村統絃会」「野村流伝統音楽協会」の四団体が活動している。

湛水流というのは，湛水親方を祖とする流派である。一言でいえば，奏法，歌唱法が湛水の頃の古型を保っているとされる。現在，湛水流の保存を目的として，「琉球古典音楽湛水流保存会」「琉球古典音楽湛水流伝統保存会」の二つの団体が活動している。

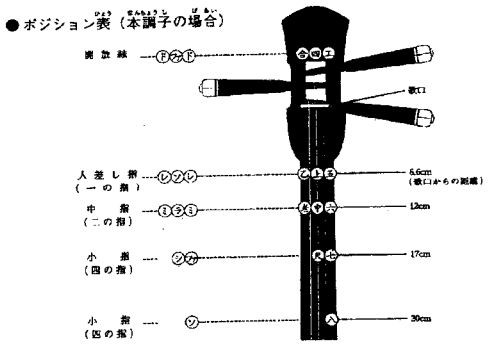
3　三線の指導法について

（1）工工四について

三線音楽の楽譜のことを沖縄では工工四（クンクンシー）と言う。

工工四は中国の工尺譜を参考にして屋嘉比朝寄が初めて譜面化したというのが一般の認識で，その最初の成果がいわゆる『屋嘉比工工四』であると考えられている。普段，西洋音楽で目にする「五線譜」と違い，縦によんでいく。それぞれのポジションと，漢字を覚えて弾いていく。

（2）ポジション表（本調子の場合）



ポジション(勘所)は以下のとおりである。

図４　ポジション表[2]（本調子の場合）

（3）工工四と洋楽譜の関係（本調子の場合）

屋嘉比朝寄によって考案された，工工四と呼ばれる琉球の三弦楽譜は，合，乙，老などの１６種の基本音符などから成り立っていて，それらのうち，合，四，工は，それぞれ開放弦で他はすべて指圧音から成り立っている。

下の図のように三線のポジションは，それぞれドレミでも合わせることができる。

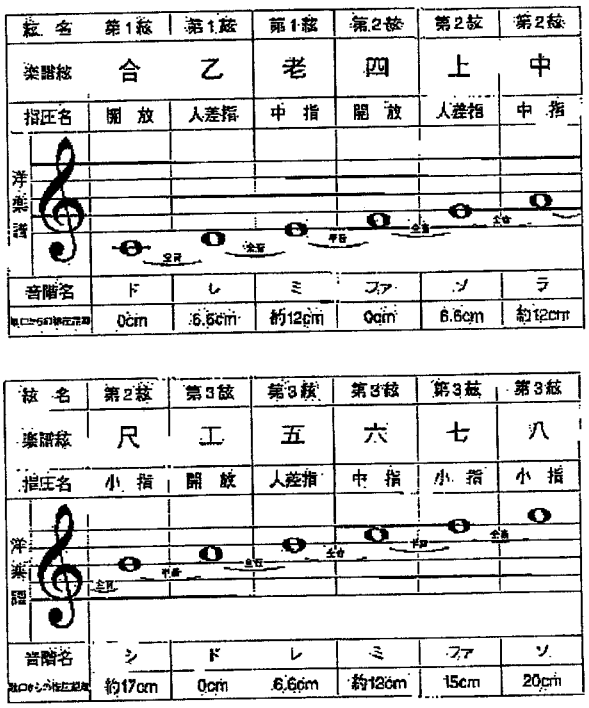


図５　工工四と洋楽譜との関係[3]

---

(2) 山内昌也著『楽しい沖縄三線教室』千野出版事業部，2001,p.7。

(3) 上掲書，p.8。

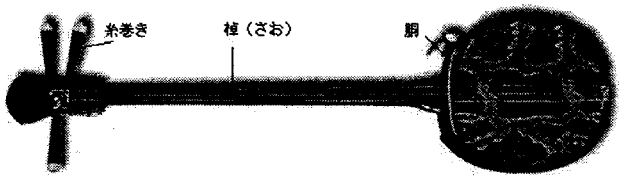
（４）三線の構造について

沖縄の三線は，棹を黒檀で作り胴体にニシキヘビの皮を張っているのがよく知られている。沖縄では，古くから床には三線二丁一対のものを三線箱に入れて飾ってある。これは飾り三線と呼んでいる。そこの主人が歌舞芸能に理解のある印であり又，生活のゆとりを示しているとも言われている。最近は型の変わったものを二丁一対にしている方々も多くなっている。

本土では，床の刀架に大小二振りの刀を置いてあり，支那では硯と墨と筆を大事に飾ってあるのと一脈相通ずるものである。蛇皮は，現在もそうであるが舶来品であり高価で一般庶民には手が出なかったので渋皮張りが多く，蛇皮張りの三線のある家は経済的にゆとりの印にも例えられたようである。

また，沖縄大戦後の間もないころは極端に材料が不足したため，胴体部分に空き缶やパラシュート，セメント袋などを利用した三線も生まれてきた。バラエティーに富んだこれらの三線をみると，沖縄の人々の三線に寄せる思いの強さと，たくましさを感じるものである。

楽器は，音を調節する「糸巻き（カラクイともいう）」，黒檀の木に漆が塗られた「棹（ソー）」，ニシキヘビの皮を張りつけてある「胴（チーガ）」からできている。全体の大きさは約８０ｃｍである。



（５）調絃方法

○調子笛やピアノなどで調絃ができる。

３絃目をＣ（ド）に合わせる。

２絃目をＦ（ファ）に合わせる。

１絃目を３弦目の１オクターブ下のＣ（ド）に合わせる。

○移動ドについて

歌う人それぞれが声の音域があり，一番楽に声が出せる音の高さがあるので，その高さに合わせて移動ドで調絃ができる。

○その他の調絃

曲によって様々な調絃がある。

二揚調（にあげちょう）：３絃目をＣ（ド），２絃目をＧ（ソ）に，１絃目をＣ（ド）に合わせる。

三下調（さんさげちょう）：３絃目をＢ♭（シ－♭）に，２絃目をＦ（ファ）に，１絃目をＣ（ド）に合わせる。

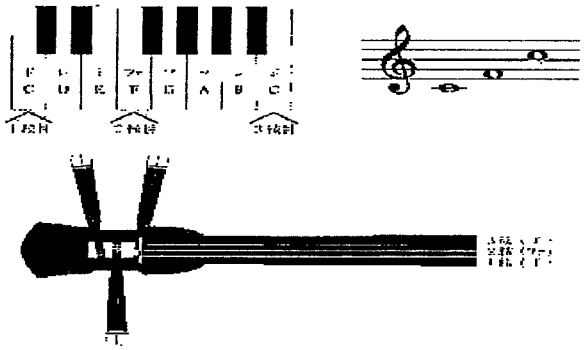
一揚調（いちあげちょう）：３絃目をＣ（ド），２絃目をＦ（ファ），１絃目をＥ（ミ）に合わせる。

三本の調絃は下のようになっている。

（６）三線の奏法

①三線の構え方

胴の周りにカバーのようなものがついている。その真ん中に丸い円の模様が上下両方にあり，下の円を自分の足の上にのせる。左手は棹のくぼんだ所にあてます。この時，手のひらを棹につけてはいけない。また，棹の頭は左肩と同じ高さまで上げ，楽な姿勢で構える。胴は自分の体から握りこぶし一つ分位離すことである。



②バチの動かし方

バチは基本的に，手首を上から下に動かして弾く。

③工工四と手の関係

左手の指には番号がついている。人差し指から順番に１の指，２の指，３の指，４の指となる。絃を指で押さえる時は，指の頭の部分で押さえる。指には力を入れず，すぐに押さえられるように弦の上に用意しておく。

（７）声楽記号について

○は休止符（但し三味線だけの休止符）を意味し，拍子ともいう。音符の右方にある声出しとまちがえないようにする。以下，よく使われる記号をいくつかあげてみた。

○	声出し（こえだし）	区画中，音符の右方にあって，その位置から歌いだすことを示す。
□	声切り（こえぎり）	区画中，音符の右方にあって，その位置にて歌い終わる。
↑↓	反復記号	この記号は，歌持（前奏）の繰り返し記号で，歌持を繰り返したいとき，後ろの記号から前の記号へと，必要に応じて繰り返して弾く事を示す。
、	打音（うちうとう）	記号は絃音符の右方に位置し，右手のバチで絃を弾かずして，左手指だけで，相当勘所を打って音を出す。
⋮	次第上（しでーあぎー） 次第下（しでーした）	尺（エ）……など次第になめらかに上げていく。 四（合）……など次第になめらかに下げていく。

（８）「安里屋ユンタ」の曲の解説

教材として取り上げる「安里屋ユンタ」の解説と意味を以下にあげてみる。

この歌は竹富島に生まれた安里屋のクヤマという美女が，１７３８年，島に査察にやってきた琉球王朝の官吏から求婚されるが，それを断ったという事実を元に作成されているらしい。

「安里屋ユンタ」のメロディーは，３種類ある。一つは伝統的なユンタで，労働歌として歌い継がれてきたもので，これを島では「安里屋ユンタ」と言っている。二つは星克氏作詞・宮良長包氏作曲の「安里屋ユンタ」で，竹富島ではそれを「新安里屋ユンタ」とよんでいる。三つ目は士族によって作られたと思われるもので，「安里屋節」とよばれている。

「安里屋ユンタ」が三線の伴奏抜きで集団歌謡として歌われていたのに対し，「安里屋節」は初めから三線の伴奏で歌われていた。また，「安里屋ユンタ」と「安里屋節」ではメロディーが全く異なる。一方「新安里屋ユンタ」は，新時代の歌としてピアノの伴奏で歌われていたが，「安里屋ユンタ」のメロディーに近いもので，共通語の歌詞で歌われる。

しかし，近年では「安里屋ユンタ」も「新安里屋ユンタ」も，「安里屋節」と同様に三線の伴奏で歌われることが多く，その三つの歌が混同されたりするが，「安里屋節」のメロディーはゆったりしている。

＜安里屋ユンタ＞

1.サー　君は野中の　いばらの花か　サーユイユイ　暮れて帰れば　やれほに　引き止める **（囃）マタハーリヌ　チンダラ　カヌシャマヨー**	1あなたは野に咲くとげのある花なのか 日も暮れて帰ろうにも 袖をとらえてはなさない　なんて可愛らしい 絶世の美女よ
2.サー　嬉し恥ずかし　浮名をたてて　サーユイユイ　主は白百合　やれほにままならぬ　（囃）	2嬉しいやら恥かしいやら　噂になって でも貴方は純真で 一緒にはなれない
3.サー　田草取るなら　十六夜月よ　（囃）二人で気がねも　やれほに水入らず（囃）	3田んぼの手入れはきれいな月夜にかぎる 二人だけで誰に遠慮も 邪魔もされない
4.サー　染めて上げましょ　紺地の小袖（囃）掛けておくれよ　情けの襷（たすき）（囃）	4染めて差し上げましょう　紺地染めの着物を 私にかけて下さい 情あるたすき掛けを
5.サー　沖縄良いとこ　一度はおいで（囃）　春夏秋冬　みどりの島よ（囃）	5沖縄は風光明媚な島です　一度はいらっしゃいませ 四季を問はず開花し 緑につつまれています

4　郷土の民謡，三線に関するアンケートからの結果と考察

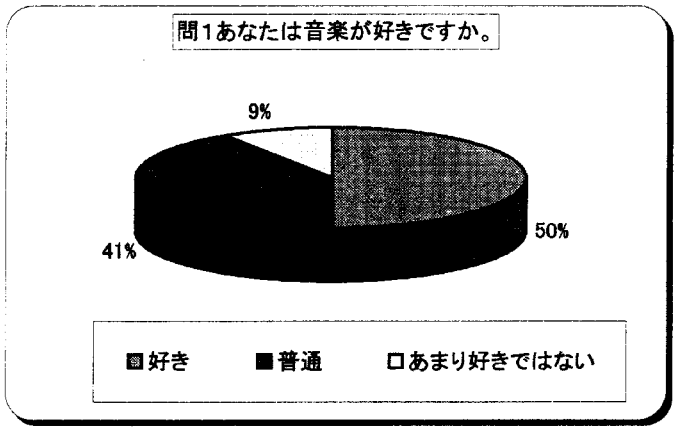
調査目的　：郷土の民謡や三線について生徒の興味・関心を把握しながら，今後の指導に生かす。

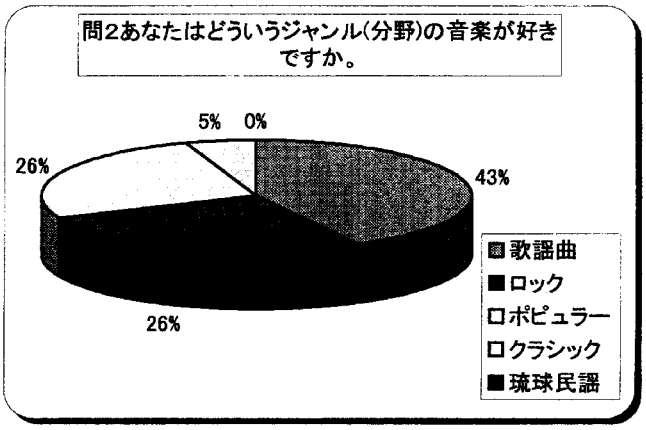
調査方法　：質問紙法

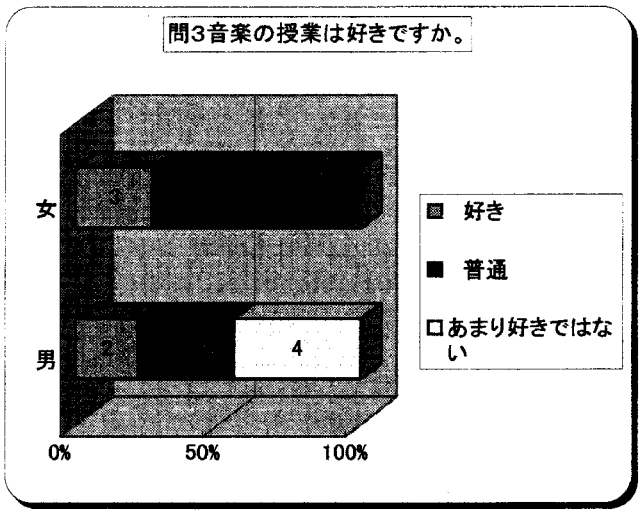
調査実施日：４月２５日

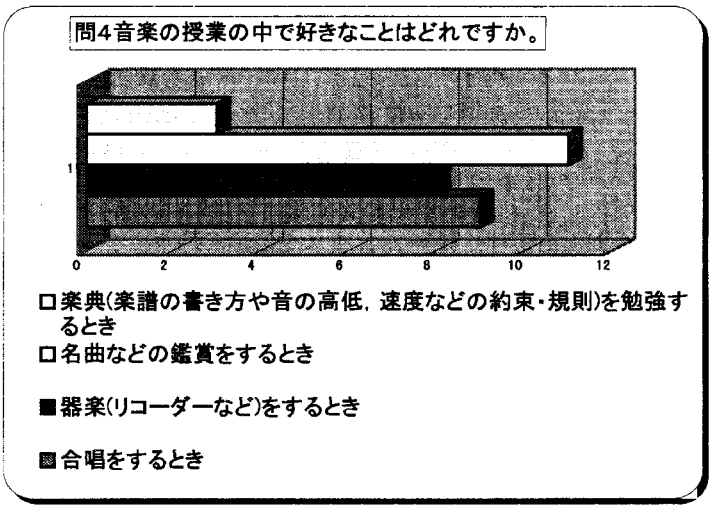
調査対象　：２年選択「音楽」　男子１０名　女子１１名　計２１名

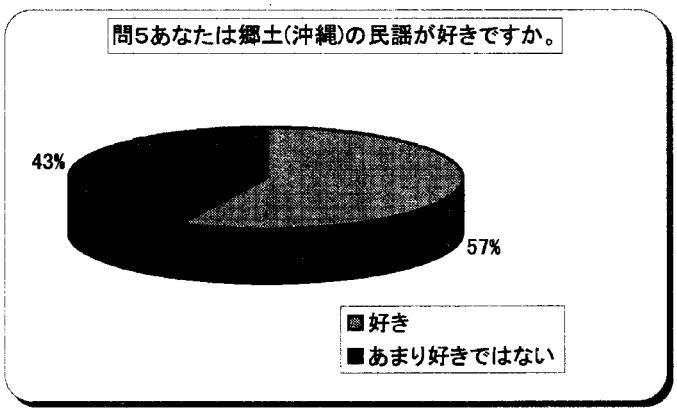
サンプル数：２１件

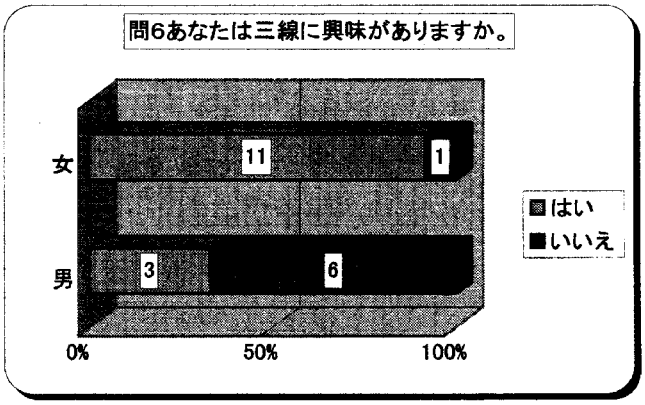












Ⅵ　授業実践

平成１３年7月１８日(金)　５校時
真志喜中学校　第２学年　選択教科「音楽」クラス
男子１０名　女子１１名　計２１名
授業者：　東みどり

１　題材名　「三線に親しもう」

２　題材の目標

①三線を弾くことによって郷土の民謡に興味・関心を持ち、伝統音楽に親しんでいける態度を育成する。
②「工工四」について理解し，三線の基礎的な奏法を身につけ楽しく表現できるようにする。
③個々の生徒が自分なりの目標を持ち，初歩的な民謡及び古典を弾けるような技能を身につける。
④友達の演奏を聴き，鑑賞の能力を高めることができるようにする。

３　題材について

（1）教材観

近年，沖縄サウンドを取り入れた歌手が出てきたことや郷土の音楽がブームになりつつあり，若者たちの間でも郷土の音楽に対しての関心が高まってきている。そこで，三線を弾く若者も増えてきている。なかには，三線を志す若者も出てくるようになった。

しかし，生徒たちをみてみると三線に興味は持っているものの，実際に弾ける生徒は非常に少ない。そこで，授業で三線を教材化し生徒たちが自ら三線を弾き，歌う場を設定することによって，郷土の音楽に興味・関心を持たせたい。沖縄の音楽は，「歌三線」と言われるように，歌と三線を同時に演奏することに特徴がある。また教材として扱う「安里屋ユンタ」は沖縄民謡として広く知られている曲である。ちなみに，歌と三線の音程がほとんど同じで，初心者にも無理なく取り組める教材である。

（2）生徒観

週に１時間の選択教科「音楽」を履修している生徒は，男子１０名，女子１１名である。「郷土の民謡は好き」と答えた生徒が 60%近くもいて民謡に親しみを感じているようである。普段の音楽に対する関心・意欲は，男子の半数の生徒が低いのに対し，女子は音楽が好きで三線も弾けるようになりたいと言う子が多い。(選択教科「音楽」での郷土の民謡，三線に関するアンケートの結果から)

ほとんどの生徒が三線を弾くのが初めてで，調弦やポジション（勘所）の位置，工工四の読み方等ゼロからのスタートである。初歩的な民謡が弾けるようになるまでにはかなりの練習が必要である。しかし，３名の生徒が三線を教わった経験があり，その生徒をリーダーとして，歌いながら弾く練習に取り組ませたい。

（3）指導観

新中学校学習指導要領音楽科における改善の要点として，以下のことを重視している。一つは「生涯にわたって音楽に親しむ態度の育成」であり，もう一つが「わが国や郷土の伝統音楽を重視すること」である。さらに，具体的事項の一つに，「和楽器などを活用した表現や鑑賞の活動を通してわが国や郷土の伝統音楽を体験できるようにする」があげられている。

以上のことを踏まえ新教育課程に沿った授業の創造を試みることにした。そこで郷土の音楽には欠かせない三線を教材化することにより，生徒の郷土の音楽に対する興味・関心を高め，さらに，その中において歌三線と言われるように，歌いながら弾くという三線の技能を身につけさせていきたい。

４　指導計画

第１時　三線キット作り
第２時　調弦
第３時　ポジション（勘所）確認，練習
第４時　「渡りザウ」の練習
第５時　「安里屋ユンタ」の練習
第６時　「安里屋ユンタ」の練習
第７時　山内昌也氏をお招きして実演
第８時　(本時)「渡りザウ」「安里屋ユンタ」「安波節」などの演奏

「郷土の民謡に興味・関心を持とう」～三線を通して～　全８時間　実施期間：２００１年５月２日～７月１８日　実施対象：選択教科「音楽」２年生男子１０名　女子１１名　計２１名

教師の支援

学習の流れ

作る

楽器の取り扱いに注意させる

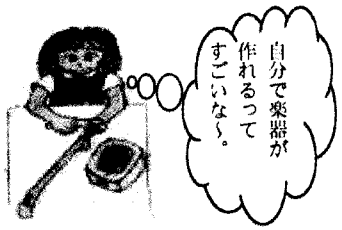
三線の名称や歴史などを知り伝統音楽の大切さを知る。

三線の正しい構え方を身につけ、勘所の位置を覚えさせる

民謡などを取りいれ伝統音楽に親しみを持たせる

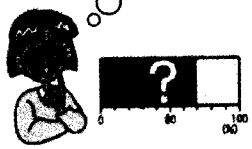
三線を作ってみよう！

三線キットを作ってみる
- 糸巻きの部分は削り過ぎない
- 三本の弦を張り違えない



三本の弦の太さが違うのね。大切にもたなくちゃ。

三線ってどこから伝わってきたのかしら？



○ 三線の構造・名称について
- 胴（チーガ）
- 棹
- 糸巻きなど

○ 三線の歴史

○ 三線の由来
- どういう人が演奏していたのかな

○ 工工四について
- 三線の楽譜はどういう楽譜かな。

６００年前に伝わった音楽で、しかも男の人だけにしか演奏が許されなかったんだ～

○ 正しい構え方を身につけよう

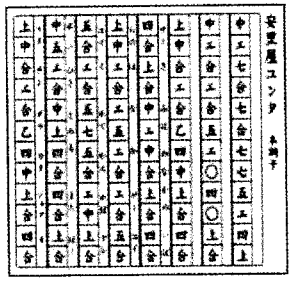
○ 弦の動かし方（手首は上から下）

○ 三本の調弦（音を合わせよう）

○ 勘所（ポジション）の位置を学習しよう
★合、四、工、乙など

工工四をよんで演奏してみよう
- 渡りザウ
- 安里屋ユンタ
- 安波節(個々の進度に応じて)

声楽記号を理解しよう



- 鑑賞マナーをよくしよう
- 伝統音楽の良さを感じ取ろう

すごい！きれいな音色

今までの練習成果を互いに楽しみながら聞きあおう

教師の支援

自分で三線を作る体験をすることにより、興味・関心を持たせる

琉球王朝時代から伝わる音楽であることを理解させる

山内昌也氏の演奏やお話しを聞き鑑賞する能力を育て、感性を育てる

それぞれの到達度に応じて練習成果を振り返ることが、できるようにする

5本時の展開

テーマ　「発表をしよう」

（1）本時のねらい

◎やさしい民謡及び古典の初歩的な楽曲の演奏を楽しめるようにする。

◎生徒個々の到達度に応じて演奏し，またお互いで演奏を聴き，評価できるようにする。

（2）授業仮説

①自分で組み立てた三線を使用することにより，三線に興味・関心を持ち，伝統音楽に親しむことができるであろう。

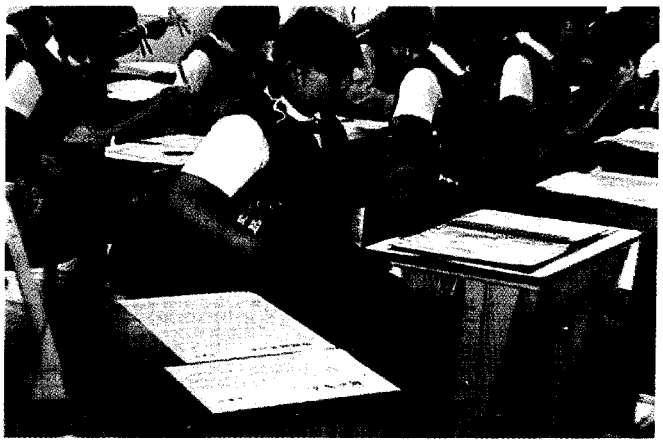
②安里屋ユンタ等の，曲の由来や歌詞の意味を理解させることによって，三線に興味・関心を持ち，伝統音楽に親しむことができるであろう。

③三線以外の楽器を取り入れて合奏するなどの工夫をすることにより，三線に興味・関心を持ち，伝統音楽に親しむことができるであろう。

（3）教材　「安里屋ユンタ」

星　克　作詞

宮良長包　作曲

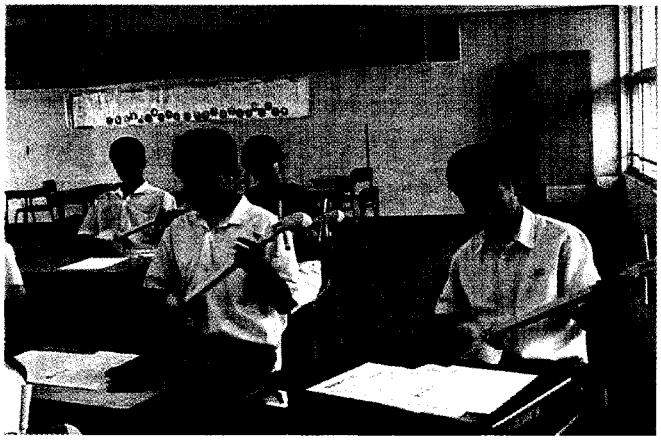


三線の持ち方にも気を付けてます

「安里屋ユンタ」：歌いながら弾くこともバッチリ！

三線キットを組み立てています

「安波節」：古典音楽を皆に披露



「安里屋ユンタ」の演奏：男子も頑張っています

ピアノやパーカッション，リコーダーを加えて合奏

（4）展開（8／8）

過程	学習活動	指導内容	指導上の留意点	備考
導入	1本時の目標の確認 2調弦（チンダミ）	・本時の目標を知る ・調弦をする （合，四，工）	掲示して生徒の学習意欲を高める。 正しい姿勢，持ち方を意識させ弾いている音に集中させる。	カード
展開	3「渡りザウ」を演奏する 4「安里屋ユンタ」を演奏する ○曲の解説を聞く ○一番を歌う ○歌いながら弾く（一番のみ） 5友達の演奏を聞く「安波節」 6リズム楽器も入れて全員で「安里屋ユンタ」を合奏する	○工工四の理解 一拍休み(○)など ○各ポジションを覚える ○「安里屋ユンタ」の歌持ち(前奏)の部分を弾く ○歌詞のある部分を弾く ○曲の由来を知る ○一番の歌詞の意味を復習する ○意味を考えながら一番のみを歌う ○歌いながら弾くことに挑戦 ○2・3名の友人の演奏で「安波節」を聴く ○他楽器を入れたサウンドを楽しみながら演奏する	○指使いと姿勢に気をつけさせる。 ○声楽記号を説明する。一拍休みなど ○テンポが速くならないように気をつけさせる。 ○四，合四上の部分が早くならないように気をつけさせる。 ○3種類あることを説明し曲も聴かせる。 言葉をはっきり歌わせる。 ○伴奏楽器としての三線はまちがえても気にしないように励ます。 ○「安波節」を基に琉歌の形式を紹介する。 ○のびのびと楽しみながら演奏させる。	掲示物
まとめ	7学習のまとめをする 8教師の話を聞く	・自己評価，相互評価をする	・本時の目標を達成できたか。 ・成果を認めてあげる。	椅子 譜面台

＜評価＞

○郷土の音楽に興味・関心を持ち，歌と三線の学習に意欲的に取り組むことができたか。

○工工四について理解し，三線の基礎的奏法を身につけ楽しく演奏することができたか。

○自分なりの目標をもって民謡が弾けるようになったか。

○各自または友人の練習成果を聴き，その演奏の良さを聴くことができたか。

6　研究仮説の検証

検証授業のまとめで，自己評価・相互評価の用紙を配布し記入してもらった。しかし，記述時間が足りなかったことや終業式の前日であったことから，６名の生徒の用紙が回収できなかった。そこで，今回は回収した１５件のサンプルをもとに研究仮説を検証していくことにする。

（1）研究仮説１の検証

三線を自分で作る過程から体験することにより，生徒が興味・関心を持ち伝統音楽に親しむ態度が育成できるであろう。

三線キットの胴・棹・糸巻きの部品を組み立てて，三線キットを完成させた。楽器を作る際に生徒に気をつけさせたことは，糸巻きの部品を削りすぎて，それが空回りしないようにするということと，弦は太いほうから１弦，２弦，３弦となっているので，それぞれ張り違えないようにするということの二点を注意した。なかには糸巻きの部品を削りすぎてやり直したりする生徒もいたが，慣れない手つきで全員がカッターや小刀などを使って一生懸命，三線作りに取り組んでいた。授業後に実施した自己評価では「三線キットを自分で組み立てて弾きましたが，三線に親しむことができましたか」の問いに，ほとんどの生徒が「親しむことができた」と答えている。実際に，生徒たちは三線を持って移動する時は，三線の扱い方も丁寧で糸巻きの部分が折れたということが一度もなかった。自分で作った楽器なので特に熱心に練習していたように思う。自己評価では「自分で組み立てたので弾けてうれしかった」や「キットだったけど，音もよく響いていて良かった」と感想を書いていた。これらのことから，生徒が自分で三線を作る体験をしたことによって，三線に興味・関心を持ち，親しむことができたということが伺える。

（2）研究仮説２の検証

郷土の民謡を教材化することにより，三線に興味・関心を持ち伝統音楽に親しむことができるであろう。

９割の生徒が三線を弾くのが初めてで，ポジション（勘所）の位置，工工四の読み方などゼロからのスタートであった。「合四工乙上五尺七などのポジションが弾けるようになりましたか。また，工工四を理解し三線の基礎的奏法を身につけることができましたか」の問いに対しては，「尺などポジションを覚えるのが難しかった」，「工工四などを覚えるのが大変だった」との感想が多かった。しかし，「難しかったけど，学習してできるようになって良かった」と，ほとんどの生徒が書いている。その感想をいくつか紹介したい。

＜生徒の感想＞

○僕は，はじめは弾くことができなくてへたでした。でも，弾けるようになって嬉しかったです。（男子）

○初めて弾けるようになって，とても感動しました。（男子）

○三線が弾けるようになったことは，すごいと思いました。（男子）

○最初は楽しくなかったけど，弾いているうちに楽しくなった。（男子）

○最初は難しかったけど，最後まで弾けて嬉しかったです。（女子）

○初めて三線をやって工工四を覚えるのが大変だったけど，楽しかったです。（女子）

○私は今まで三線の学習をしましたが１曲を弾けるようになるとは思ってもいませんでした。弾けるようになって嬉しかったです。（女子）

○選択授業で三味線をやって，三味線が弾けるようになって良かったです。（女子）

○三線を頑張りました。歌と三線ができるようになって嬉しかったです。まちがったことも，いっぱいあったけど楽しかったです。（女子）

○２ヶ月半ぐらいしかたっていないけど，工工四も読めるようになったし三線を弾きながら歌も歌えるようになって良かったです。（女子）

○「安里屋ユンタ」は前から弾けたけど友達と練習をいっぱいしたことで，むやみに速度が早くなったりせずに，みんなと一緒にあわせて弾けるようになった。（女子）

また，去った７月４日には山内昌也氏をお招きし

て，「かぎやで風節」や「唐船ドーイ」などの実演をしていただいた。その時の生徒の感想としては，「すごいなあと思った」，「うまかった」，「祭りでよく聞く歌（唐船ドーイのこと）を弾いたのがうまいと思って印象に残った」など，若いのに三線がうまいことに驚くと同時に，さらに民謡を身近に感じたようである。以上のことから生徒が，郷土の民謡を教材化することにより三線に興味・関心を持ち，伝統音楽に親しみを持ったことがわかる。

（3）研究仮説３の検証

<u>発表の場を工夫することにより，生徒が興味・関心を持ち伝統音楽に親しんでいけるであろう。</u>

発表の場では個々の生徒が，それぞれの到達度に応じて練習成果を振り返ることができるように工夫した。

全員で既習曲の「渡りザウ」を練習した後，「安里屋ユンタ」を学習した。最初は三線だけで練習し，次に，歌いながら三線を弾く練習をした。次に，「安波節」を基に琉歌の形式を紹介し，実際に演奏の上手な２・３名の生徒に弾き語りをしてもらった。その後，初めての試みでピアノやパーカッション（ドラムやカスタネット），アルトリコーダーなどを取り入れた合奏に挑戦した。

最後の自己評価・相互評価では，「打楽器やピアノ，アルトリコーダーなどを取り入れて合奏した感想を書きなさい」という問いには，「弾きにくかった」，「いろいろな楽器があって歌いにくかった」との２名の感想はあったものの，「きれいな合奏だった」，「よかったと思う」，「打楽器などよかった」，「すごかった」，「かっこよかった」，「三線だけじゃなんかさみしいけど，いろいろな楽器を入れておもしろかった」，「いろんな楽器がまざって楽しくできた」などの感想が多く，三線だけの演奏とは違う楽しみを味わったようである。「安里屋ユンタ」の合奏を終えて，相互評価の項目である「友人の演奏を聴いての感想を書いて下さい」の問いには，「みんなほとんど初めて習ったけど，とても上手になっていた」と生徒全員が，うまくなっていると評価している。

以上のことから，発表の場を工夫することによって，郷土の民謡に興味・関心を持ち伝統音楽に親しみを持ったことが伺える。

Ⅶ　研究の成果と課題

1　研究の成果

（1）三線キットを自分で作る体験をさせたことにより，三線の構造について知ることができ，興味を持つことができた。

（2）工工四について理解し，三線の基礎的奏法を身につけ表現することができた。

（3）いろいろな表現の楽しさを味わうことができた。

（4）三線を教材化することによって，郷土の音楽に親しむ生徒が増えた。

（5）選択教科「音楽」は希望した生徒によって構成されたことから，郷土の音楽に興味・関心を持った生徒に対応できた。

2　今後の課題

（1）初めて楽器をもってから検証授業までの授業時数が５時間しかなかった為，曲を仕上げる時間が足りなかった。

（2）今回は時間的な制約から十分な指導ができなかったので，学校現場に戻ってから，基礎からじっくりと時間をかけて指導していきたい。

（3）郷土の伝統音楽を選択教科「音楽」の時間だけでなく，他の教科や総合学習などとも関連させることで，合科的・関連的な指導を図っていきたい。

（4）今回は，２曲を仕上げるので精一杯だったが，今後は生徒の興味・関心を継続できるように指導の工夫し，他の曲にも挑戦していきたい。

（5）今回は，手頃な三線キットを購入し，選択教科「音楽」で三線の教材化をすることができた。しかし，まだ楽器が不足しているので生徒の興味・関心に対応できるように，必要な本数を整備していきたい。

3　終わりに

あっという間の半年間でしたが，今までできなかった伝統音楽についての研究をすることができ，私にとって大変有意義な研究期間でした。この研究で得た

成果と課題を今後の実践に生かしていきたいと思います。

本研究を進めるにあたって，初めて取り組む三線の授業に必要な実技指導や，助言を与えて下さった仲西小学校の入里叶男先生，選択教科の授業で生徒達に実演・実技指導をして下さった山内昌也先生，研究テーマから研究報告書までの原稿作成を多忙な中，懇切丁寧に何度も御指導下さった新垣英司研修係長，先生方の御指導がなければ、進めるのに困難な研究でした。言葉では言い表せないほど感謝しております。本当にありがとうございました。また，いつも笑顔で激励して下さいました普天間朝光所長をはじめ宜野湾市教育研究所の職員の皆様には，大変お世話になりました。感謝申し上げます。

そして，この研修の機会を与えて下さった真志喜中学校の玉城勝秀校長，しぶる私の背中を押して下さった下地宏邦教頭，真志喜中学校の職員，何かと支えて下さった同期研究教員の先生方に感謝致します。ありがとうございました。

＜主な引用文献・参考文献＞

・勝連繁雄著『歌三線（わかりやすい）の世界―古典の魂―』ゆい出版，1999。

・山内昌也著『楽しい沖縄三線教室』千野出版事業部，2001。

・滝原康盛著『琉球民謡解説集　上巻』琉球音楽楽譜研究所，1999。

・滝原康盛著『正調　琉球民謡工工四　第八巻』琉球音楽楽譜研究所，1995。

・峯岸　創著『新中学校教育課程講座＜音楽＞』ぎょうせい，2000。

・文部省『中学校学習指導要領』大蔵省印刷局，1998。

・文部省『中学校学習指導要領　解説―音楽編―』教育芸術社，1998。

・西園芳信著『音楽科の学習指導と評価』日本書籍，1996。

山内昌也氏を招いての実演・実技指導

「四　合四上　合・・・♪と，弾くのよ。」

「三線が弾けるようになってうれしい～！」

あとがき

現代社会の国際化や情報化等の急激な変化に伴って，学校教育も新たなステップへとシフトが始まっています。先行き不透明な時代といわれるこれからの社会変化へ対応していくためには，これまでの学校教育のあり方を改め，生涯学習の理念を基にした新しい教育パラダイムへの転換を図っていかなくてはなりません。つまり，これまでは学校で獲得した知が生涯にわたって通用してきたのに対して，これからの社会では学校教育で獲得した知だけではもはや通用しなくなってきています。学校教育を終えた後もよりよく生きていくためには必要な知を自ら獲得していかなくてはなりません。このことから，生涯にわたって学びつづけるための学び方を学ばせることがこれからの学校教育の重要な使命になってくるのです。さらに，いじめや不登校，学級崩壊，青少年犯罪等の様々な教育課題への対応も学校教育に求められています。現在の学校教育への批判は裏を返すと学校教育への大きな期待の現われでもあると言えます。つまり，これらの社会変化への対応や教育課題への解決に当たっては「教育」こそが，最大の対応策なのであります。

さて，平成１４年度から完全実施される新学習指導要領においては「生きる力」の育成を目指し，そのストラテジーとして基礎基本の徹底や心の教育の充実，「総合的な学習の時間」の新設，コンピュータ等の情報活用能力の育成が重視されています。ちなみに，「総合的な学習の時間」においては「自ら課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力を育てるとともに，学び方やものの考え方を身に付けるようにすること」をねらいとしています。

このような時期に，大謝名小学校安次嶺伸先生の「総合的な学習」におけるコンピュータやインターネットを活用して子どもたちの情報活用能力の育成を目指した研究，嘉数中学校安里秀子先生の選択教科国語科における方言や琉歌・地域人材の教材開発を通して郷土の文化に対する誇りと愛情を育てる研究，真志喜中学校東みどり先生の選択教科音楽科における郷土の民謡とサンシンの教材開発を通して郷土の文化に親しんでいく態度の育成を目指した研究は大変時宜を得た研究であると考えます。

この第１８号『研究報告集録』に掲載された報告はいずれも，児童生徒の発達や特性に基づいた上での実践研究であり，第１８期研究教員の児童生徒に対する深い愛情や教育への熱い思い，さらに，研究にたいしての誠実な姿勢が伺えることと思います。第１８期の御三名の先生方におかれましては，この半年間の研究所生活において教育の道の厳しさと研究の大切さを痛感なされたことと思います。研究がスタートした当初は光が見えず不安で一杯だったことでしょう。しかし，研究することによって明るい光が見えてきます。今は教育者としての確かな自信と子供たちのもとに帰れる喜びで胸が一杯だと思います。翻って子供たちは無知や分からないことへの苦しみや不安と闘いながら，一つ一つ課題を解決し知識を吸収しながら楽しさや喜びを感じるという「学びの世界」に生きています。「学び続ける教師のみが子供の前に立てる」という格言どおり，日々，研修に励む教師だけが子供の心を理解し，子供と共に学んでいけるのではないでしょうか。ぜひ，本教育研究所での研究成果と課題を学校現場に持ち帰り，これからの教育実践に生かしていってほしいと思います。

終わりに，第１８期研究教員の半年間にわたる研修において情熱と誠実さをもって日夜，地道な研究・実践に励まれたことに対して深甚より敬意を表します。また，本研究を推進するにあたり一方ならないご指導とご支援を賜りました関係各方面の皆様に，心から厚く御礼申し上げます。

平成１３年９月
宜野湾市立教育研究所
研修係長　新垣英司